

綱吉の孝行奨励と諸作品の成立

——駿河国五郎右衛門をめぐって(一)

勝又 基*

一 はじめに

駿河国富士郡今泉村の富農・五郎右衛門は、その孝行が延宝九(一六八二)年四月、駿州筋を廻る巡見使の目に止まり、上聞に達した。翌天和二(一六八二)年三月に幕府から招かれて江戸へ行き、同十二日には当時所有した田地九十石の年貢を永代免ぜられ、同月二十二日には徳川綱吉による朱印状を賜っている。『常憲院殿御実紀』(以下『徳川実紀』と称す)は彼を江戸時代において幕府から表彰された初めての孝子であるとしている。江戸時代の孝子表彰・孝子説話を考える上で、最も重要な一人である。

すでに知られている資料だが、五郎右衛門の生家・中村家には、『駿州今泉村五郎右衛門儀ニ付江戸ニ而諸事覚書』(以下『諸事覚書』と称す⁽¹⁾)なる写本が残っている。これは延宝九年四月八日に諸国巡見使が駿河国

に来てから、天和二年三月に五郎右衛門が江戸で表彰を受け、同年四月十六日に江戸を発って故郷に帰るまでの、さまざまな書簡・書類・出来事を詳細に書き留めたものである。筆者は同道した大宮代官・井出治左衛門の手代、甘利与左衛門であって、信憑性も揺るぎない。江戸時代で最も早く幕府から表彰されたという孝子に、かかる資料が残っている事は幸いと言ふ他ない。

そしてもちろん、この中村家文書を用いての研究も、すでにある程度進んでいる。早くは日尾天昭「駿州今泉村五郎右エ門御取調覚書」がその経緯を跡付け、近年では若林淳之「吉原市史」上巻⁽³⁾、同氏「孝子五郎右衛門褒顕のあとさき」⁽⁴⁾が改めてその史的位置付けを試みている。

ただ従来の研究は、ほぼ中村家文書だけを用いるに留まっており、他の史料への目配りが十分になされていないくらいがある。私の調査したところでは、内閣文庫に蔵する幕府をはじめとする記録類、さらには江戸文学作品の中にも、なお多くの五郎右衛門に関する資料を見出す事ができた。所見の資料については続稿「孝子説話と表彰」——駿河国五郎右衛門をめぐって⁽⁵⁾に整理した。またその一端、『誹諧絵文匣』(享保七(一七二二)年刊)については拙稿『誹諧絵文匣』注解⁽⁶⁾(三)で注釈を施した。

このような資料的な補強を踏まえて本稿で考えたいのは、五郎右衛門の表彰にまつわる諸作品の成立についてである。なぜ作品の成立が問題となるのか。この事を説明するために、まず五郎右衛門に関してかならずと言って良いほど用いられる資料を引用したい。『徳川実紀』天和二年三月十二日条である。

駿河国富士郡今泉村農民五郎右衛門、至孝にて、其うへ近郷を賑救すること、こたび巡見使見聞して帰り、聞え上しにより、是を褒顕

せられんとて、其田地九十石、永く賦税徭役を免さるべしとの御朱印の券を賜はり、儒臣林春常信篤に命じ、其伝を作らしめて刊行せらる。これ当家の世となり、孝子節婦等を旌表せらるゝはじめなり（下略。傍線引用者。以下同じ）。

傍線部によれば、綱吉が林春常（鳳岡）に五郎右衛門の伝を作らせたところがあるが、この箇所は二つの点で誤っている。詳細は後に述べるが、まず第一に綱吉は林春常に伝記作成を直接命じてはいない。また第二に、この春常作の伝記は刊行されていらないのである。かように基本的な資料でさえも誤りが多く、ほとんど明らかになっていないのが、表彰をめぐる作品成立事情に関する現状である。

しかしこの問題は、蔑ろにして良いものではない。なぜならこの点こそ、近世孝子説話において極めて重要なポイントだからである。表彰という政治行為と作品成立とが深いつながりを持っている事は、近世文学の中でも孝子説話を持つ最も特徴的な点の一つであると言って良いであろう。だとすれば、表彰にちなんで作品が成立する瞬間は、その特徴が最も先鋭的に現れる時点であると言う事ができる。つまり孝子表彰に関する作品成立の瞬間を明らかにする事は、近世文学における政治と文学との関わりを跡づけるための、数少ない機会の一つだと考えるのである。よって本稿では五郎右衛門を例として、孝子表彰に関わって、どのよう^⑧に作品が生まれるのか、という事をできるかぎり具体的に跡づけて行く事とする。

二 対象作品と略年表

五郎右衛門を取り上げた作品は数多いが、述べてきた通り本稿では五

郎右衛門の表彰と作品成立との関わりという点に問題を絞りたい。したがって、時代の下る作品については先述の通り続稿に譲る事として取り上げない。本稿で取り上げるのは、五郎右衛門表彰との関わりが人的あるいは時間的に密接した作品、具体的には左の四作である。

作品一「五郎右衛門像賛」藤原秀信画、林春常（鳳岡）賛。天和二年六月ころ成るか。

作品二「五郎右衛門刷物」作者不明。天和二年のうち刊。

作品三「孝子今泉村五郎右衛門伝」林鳳岡作。天和三年九月成る。

作品四「六字名号父母画幅」長谷川等伯画、南門（尊任）書。天和三年十月成る。

これらの作品を表彰や人的な動きの中で位置づけるために、続いて左に略年表を提示しておく。

《五郎右衛門の表彰と作品成立に関する略年表》

- ① 延宝九（一六八一）年四月八日、巡見使が比奈村（現静岡県富士市比奈）に宿泊の際、五郎右衛門と面会する。（諸事覚書）
- ② 天和二（一六八二）年二月十三日、勘定奉行三名（大岡五郎左衛門、高木善左衛門、彦坂源兵衛）の連名で、大宮代官の井出治左衛門へ五郎右衛門の素性に関する問い合わせの手紙が来る。二十日に井出治右衛門から返事を出す。（諸事覚書）
- ③ 二月二十九日、この日付で五郎右衛門を江戸へ召す由の書状（勘定奉行連名）来る。（諸事覚書）
- ④ 三月三日、昼ごろ五郎右衛門ら駿州今泉村を発ち、五日昼ごろ江戸着。まず井出太左衛門を訪ねる。以後四月十六日（年表⑬）までの江戸滞在において、江戸の井出太左衛門が宿泊・取り次ぎなどの世

話役をつとめている。(諸事覚書)

⑤三月五日、勘定奉行高木善左衛門と面会、孝行についての尋問を受ける。三月六日の晩、甘利与左衛門、中村忠右衛門、中村五郎右衛門の三人で、五郎右衛門に関する報告書を作成する。(諸事覚書)

⑥三月十二日、明六つ過ぎ、評定所に呼び出され、老中大久保加賀守から田地の租税免除を言い渡される。(諸事覚書)

⑦三月十三日、老中阿部豊後守、巡見使宮崎善兵衛、若年寄二名に会う。十四日、設楽長兵衛ら八名へお礼。阿部豊後守へお礼。三奉行へ報告。十六日、榊原越中守と面会。高木善左衛門より手紙来る。宮崎善兵衛を訪れる。十七日、井出三郎兵衛、井出甚五左衛門と面会。(諸事覚書)

⑧三月二十二日、前日の呼び出しに応じて評定所へ出頭。老中戸田山城守・儒者奉行衆・町奉行衆・勘定奉行衆も同座。朱印状を賜る。晩に勘定奉行へ挨拶。

⑨三月二十三日、老中達に挨拶ののち、寺社奉行酒井大和守に挨拶。二十四日、勘定奉行三名立会いのもと、大老堀田筑前守正俊と面会。(諸事覚書)

⑩四月一日、勘定奉行彦坂源兵衛に呼ばれ、老中からの伝言として国元へ帰るよう命ぜられる。しかし五郎右衛門、滞在延長を申し出て認められる。(諸事覚書)

⑪四月三日、天野弥五右衛門に招かれて饗応を受ける。米津出羽守や、絵師・狩野主水などが同座。これが五郎右衛門と天野弥五右衛門との初対面である。(諸事覚書)

⑫四月十三日、天野弥五右衛門から中村五郎右衛門に、記念品の希望を尋ねる手紙が来る。(諸事覚書)

⑬四月十六日、江戸を発ち、今泉村へ戻る。(諸事覚書)

⑭六月十八日、二度目の江戸行。將軍綱吉、綱吉の生母桂昌院、綱吉一子徳松に会う(天和二年日記)。またこの滞在中、【作品一】(五郎右衛門像賛)成るか。五郎右衛門と林鳳岡との初対面と思われる。(思忠志集)

⑮天和二年のうち、【作品二】(五郎右衛門刷物)成る。(思忠志集)

⑯天和三(一六八三)年九月、【作品三】(孝子今泉村五郎右衛門伝)(林鳳岡)成る。(識語)

⑰十月十五日、【作品四】(六字名号父母画幅)成る。(識語)

⑱貞享元(一六八四)年三月六日、天野弥五右衛門から五郎右衛門へ書状「駿河国今泉孝農夫江遺状」を送る。(思忠志集)

三 天野弥五右衛門長重との出会い

延宝九(一六八一)年四月に巡見使から見いだされた五郎右衛門は、請われて翌年三月五日に江戸へ登った(年表①～④)。そこで彼は表彰されると共にさまざまな人物と面会する事になる(年表⑤～⑨)。その詳細は右の年表および『諸事覚書』に詳しいが、ここで着目したいのは五郎右衛門が江戸に来てから面会した人物が、比較的限られているという事実である。もちろん若干の例外はあるものの、頻繁に出入りするものは、大老・堀田正俊を筆頭として、老中であった大久保加賀守忠明、阿部豊後守正武、戸田山城守忠昌、勘定奉行であった大岡五郎左衛門清重、高木善左衛門守勝、彦坂源兵衛重治、駿河で五郎右衛門を見出した巡検使の渡部久助、宮崎善兵衛、武藤庄兵衛、といった辺りに限られている。彼らは要するに、五郎右衛門を公式に表彰するのに必要な人物であった。

そして三月二十二日に江戸で朱印状を受けた五郎右衛門は、四月一日に老中から帰国せよと命ぜられている。ここにおいて五郎右衛門の江戸行きは役目を終えた訳である。しかし右の表彰の際に列座しているべきであった駿河の大宮代官・井出治左衛門が所領の用事でまだ駿河におり、これからお礼の為に江戸へ来ると言う。五郎右衛門はそれを江戸で待ちたいと申し出て許され、結局四月十六日まで江戸に滞在する事になったのである（年表⑩）。

この段階にいたって五郎右衛門は、天野弥五右衛門なる人物とはじめて面会する（年表⑪）。結論から述べれば、この遅れてきた訪問者・天野弥五右衛門こそ、五郎右衛門に関連した諸作品の成立に深く関わる事になる人物である。

この初対面に関してまず着目したいのは、五郎右衛門が天野弥五右衛門と初めて会った時期が、公的なすべてが完了した後であり、さらには人間的な関係も見出しがたいものなのだという事である。

加えて着目したいのは、その初面会が押しかけのようなものでさえあった事である。五郎右衛門と天野弥五右衛門との初対面時の状況は、『諸事覚書』では次のように記されている。

一、同（勝又注：四月）三日、御鉄砲頭天野弥五右衛門様より五郎右衛門ニ御逢被成度由、太左衛門様（勝又注：井出太左衛門）へ被仰越候ニ付、与左衛門同道ニ而罷越候得者、米津出羽守様御出被遊五郎右衛門ニ御逢被成候。則御料理被下候。御列座ニ而御逢被遊候御方々ニ者、米津出羽守様、中山平右衛門様、細井佐次郎右衛門様、仙石左近様、青山内記様。五郎右衛門御相伴ニ者、狩野主水、是ハ絵師ニ而候由。但し弥五右衛門様より五郎右衛門ニ金百疋被下置候事

傍線部によれば、井出太左衛門を通して、天野弥五右衛門の方から会いたいという意志を伝えて来たというのである。

この天野弥五右衛門とはいかなる人物であろうか。彼とその随筆『思忠志集』については、評伝『元禄養老夜話——旗本天野弥五右衛門の晩節』⁹⁾が氏家幹人に備わり、本稿も教えられる所が大きかった。これに拠り、また『寛政重修諸家譜』などで自らも確認した所を簡単に整理し直しておこう。天野弥五右衛門は、諱・長重。はじめ長三郎と称す。天野小三郎長信の子として元和七（一六二一）年生。寛永十一（一六三三）年、十四歳ではじめて將軍家光に拝謁。延宝四（一六七六）年から元禄二（一六八九）年までは鉄砲頭。そののち御鎗奉行、御旗奉行を歴任して元禄十四（一七〇一）年致仕。宝永二（一七〇五）年十二月十二日没、八十五歳。五郎右衛門が表彰された天和二（一六八二）年三月の時点では鉄砲頭であった。

この初対面の十日後、四月十三日には、天野弥五右衛門から五郎右衛門へ次のような手紙が届いた（年表⑫）。

昨日者御入来令満足候。随而近日在所江被帰候由、暇乞被申置不浅候。他行不及面如此ニ候 以上

猶々 其方家為末代旁候間、（勝又注：井出）太左衛門殿御申次第遂御相談、春常老たのみ申義可有之候。返く昨日他出残念之至ニ存候。今日太左殿江御見舞申事、可有之候。左候ハ、面談暇乞可申候 以上

四月十三日

天野弥五右衛門

五郎右衛門殿

近日帰郷する五郎右衛門が天野弥五右衛門宅へ暇乞いに来たが、弥五右衛門が外出中で会えなかった、という挨拶の手紙である。

注目したいのは、傍線の尚々書きに見える「其方家為末代旁候間、太左衛門殿御申次第遂御相談、春常老たのみ申義可有之候」との文面である。この箇所は意味が取りにくいけれども、其方（五郎右衛門）の末代の為になるのだから、（井出）太左衛門へ言ってくれば春常（林鳳岡）に頼むつもりだ、と理解できる。つまり天野弥五右衛門は、中村五郎右衛門↓井出太左衛門↓天野弥五右衛門↓林鳳岡、という注文ルートでの作品成立を持ちかけているのである。

林鳳岡は寛永二（一六二五）年生、享保十七（一七三二）年没、八十九歳。林鷲峰の次男として生まれた。兄が先に没して延宝元（一六七三）年には林家の家督を継いでおり、当代を代表する儒学者であったと言って良いであろう。その鳳岡の個人名を挙げて何かプレゼントをと申し出る辺りには、天野弥五右衛門のこの申し出が単なるあいさつではなく、現実的なものである事が窺われる。

つまり天野弥五右衛門は、五郎右衛門宅に押しかけた当初から、五郎右衛門のために何かをしてやろうという心づもりでいたのである。

四 二度目の江戸行と饗応

—— 作品一「五郎右衛門像賛」の成立

江戸で表彰され、天野弥五右衛門と会った五郎右衛門は、天和二年四月十六日に江戸を離れた（年表⑬）。しかし年表⑭に見える通り、その後約二ヶ月で再び江戸を訪れている。これは『諸事覚書』には見えない記事で、今回の調査ではじめて明らかになった事実である。内閣文庫蔵写本『天和二年日記』三月十二日の記事には次のようにある。

重而六月十八日ニ堀田筑前守殿、牧野備後守殿承り、井出治左衛門

殿、五郎右衛門を召連登城被仰付、御目見仕候。

一 銀子五枚

一 御羽織一麻単五郎右衛門拝領

五郎右衛門本名御尋中村と申上ル。自今以後今村ニ御改被下。

一、桂昌院様御所望ニ五郎右衛門ヲ三ノ御丸江召寄御覽被成、即西ノ御丸江被遣、若君様へ御目見

先にも述べた通り、年表⑬⑭に見た天和二年三月～四月の江戸滞在では、大老までは面会したものの、將軍への御目見は叶っていなかった。

しかしこの二度目の江戸行きで五郎右衛門は、初めて將軍綱吉へ御目見を果たしたのである。またこの江戸滞在では綱吉の生母・桂昌院にも拝謁した事が分かる。そのさい桂昌院が若君、すなわち当時四歳の綱吉一子・徳松にも引き合わせているのは興味深い。徳松はこの翌年の天和三（一六八三）年閏五月に五歳で没する訳だが、当時実在の孝子がどれほど珍重されたか、という事を示す出来事のように思われる。

しかし本稿においてより重視したいのは、この年表⑭の江戸行、あるいはそれ以後の別の時期に、五郎右衛門は少なくとも一度は江戸に登り、天野弥五右衛門から饗応を受けているという事である。その事が明らかにするのは『思忠志集』千五百四十九段「孝人（天和二戌年）」の項に貼り付けられた肉筆像賛、作品一「五郎右衛門像賛」によってである（左図参照）。

平伏した中年男性が描かれ、賛には「今泉村民／能事双親／方寸之志／一家有仁／天恩免租／郷榮超倫／孝感報応／令名不泯」とある。『鳳岡林先生全集』巻百七に収められた「今泉五郎右衛門賛」はこれを採録したものである。⁽¹⁰⁾

画者署名には「藤原秀信」とあるが、これは狩野派築地小田原町家の



作品一（五郎右衛門像賛）

柳雪秀信である。万治三（一六六〇）年に御目見を果たし、元禄九（一六九六）年に屋敷を拝領している。正徳二（一七一二）年八月二十六日没、六十七歳（『古画備考』）。先に見た天和二年四月三日の饗応（年表⑪）で同座していた狩野主水（梅雪為信）の兄にあたる。天野弥五右衛門は饗応の度に絵師を座敷へ呼んでいるのである。

さらに賛を付している林整字が、天野弥五右衛門が作品依頼をしていた林鳳岡（春常）の別号である事にも注目せねばならない。この賛によって、前節で見た天和二年四月十三日付け書簡での傍線部で約束した通り、林春常（鳳岡）と五郎右衛門とが、ここでもうやく同席するに至ったのである。そしてその差配をしたのが、この画賛の原画を自らの写本随筆『思忠志集』に貼り付けた天野弥五右衛門であった事は疑うべくもない。

年表⑪では、弥五右衛門が押しかけのような形で五郎右衛門を饗応に迎えている様子を見た。加えてこの年表⑭に該当する箇所では、再び（あるいは三たび）江戸へ来た五郎右衛門を饗応し、その場へ絵師や儒者を呼び、画や賛を作らせている様を見て取る事ができた訳である。ただし、この像賛が天野弥五右衛門編の随筆『思忠志集』に貼り付けられている事からも分かるとおり、これは中村五郎右衛門へとプレゼントされたものではなかった。むしろ天野弥五右衛門自身の記念のために作られたと言う方が適当である。

五 五郎右衛門伝の依頼者

作品三「孝子今泉村五郎右衛門伝」の成立

右のような時期を経て、作品三「孝子今泉村五郎右衛門伝」（天和三年九月成）が生まれる。漢文で書かれたこの作品は広く流布しており、五郎右衛門の伝記として現在最もよく知られているものである。作者は林鳳岡。第一節で見た『徳川実紀』において「儒臣林春常信篤に命じ、其伝を作らしめて刊行せらる」としていたのが該作を指すであろう事は疑いがない。

しかし第一節でも述べたとおり、この『徳川実紀』の記事には問題がある。とくに問題があるのは、五郎右衛門の伝記を、「儒臣林春常信篤に命じ、其伝を作らしめて刊行せらる」という箇所である。

まずこの伝記は刊行されていないらしいのである。『国書総目録』などを見ても、林鳳岡「孝子今泉村五郎右衛門伝」が刊行された形跡は見ることができないし、幕府の記録類に徴してもそうした記事は見出せなかった。つまり林鳳岡が書いた五郎右衛門伝は、所見の限りでは、当時

刊行された形跡が見られないのである。

さらに、より重要であろうと思われる誤りは、該作は徳川綱吉が作らせたものではないという事である。該作の識語には「天和三年癸亥季秋之日依天野弥五右衛門長重所求為之伝／東部州学整宇林春常識」と、天野弥五右衛門長重なる人物の依頼によって書いたと明記されている。すなわちこれは、綱吉の命によって編まれたのではなく、幕臣・天野弥五右衛門が依頼して成ったものである。やはり該作は、幕府の営為と言ふよりは、天野弥五右衛門の個人的なものと考えるべき作品であるようだ。

彼が該作に込めた気持ちは、その装訂からも見て取ることが可能である。

諸本のうち、中村家に蔵される一本の函書（貞享元年六月 天野弥五右衛門）には、この一本をわざわざ京都町奉行・井上志摩守に託して装訂せたと記されている（『岳南史』⁽¹⁾）。また架蔵本ほかの諸本に見える村田常堅の識語（貞享元年初秋）には、天野弥五右衛門が自身で訓点を施した事や、この文章を冊子本や卷子本と成して、天野弥五右衛門の長子・甚右衛門長頼の妻が手ずから装訂を行った由が記されている。いずれも天野弥五右衛門が該書作成に力を入れた事を示す事例であり、彼が該作に込めた真剣な思いを窺い取るに十分であろう。

先に第三節では、天野弥五右衛門が中村五郎右衛門の滞在先に押しかけ、五郎右衛門のために何か林鳳岡に作品を頼んでやろうと申し出ていた事を見てきた。また、第四節では、五郎右衛門にプレゼントはされなかったものの、実際に林鳳岡の賛を付した五郎右衛門の像賛の存在を確認した（作品一）。そして、この作品三「孝子今泉村五郎右衛門伝」に至って、ようやく実際に天野弥五右衛門から中村五郎右衛門へとプレ

ントが作られ、贈られた訳である。

六 もうひとつの五郎右衛門伝

——作品二（五郎右衛門刷物）

さて、ここでつけ加えておきたいのは、これとは別の作品で、実際に刊行された五郎右衛門伝があったという事である。『思忠志集』第千五百四十九「孝人（天和二戌年）」の段の中には、次のような興味深い記事を見て取る事ができた。引用中にも見えるが、巷間に出回っていた瓦版を書き写したもので、私に作品二（五郎右衛門刷物）と名付けたのがこれである。やや長くなるが、該当記事の全文を引用する事としたい。

一 五郎右衛門孝行を世ノ人感、於江戸板行仕、童蒙兒女まで翫び、商売にして求利者、是以五郎右衛門が不慈悲哉。故感心而板行を書写、今記之。絵も有つれども略之。

爰に有がたかりける物語、今度駿河国、今泉村といふ所に、宜くらす百姓、其名をば五郎右衛門と申て、うとく成農人也。然に此人、慈悲第一にて、過ツル申酉二年（勝又注：延宝八へ一六八〇）年・天和元（一六八一）年）之飢饉に付、我手下の百姓に、それ〴〵に心をつけ、金銀を借すといへども、利足を不取かしにけり。或ハ非人等に至まで、せぎやう引事、度〴〵也。慈悲なされ深き事、誠に詞にも、のべがたし。又親に孝なる事、世にかくれなし。その孝行と謂は、朝夕の食事なども、手づからとゝのへ、給仕などをして、ふたりの親にあたへけり。或時は又、親大用小用なども、器にいれ、手自はこび捨ルとか哉。何にても親云ル、如此に、背事なし。誠に、古人の言葉にも、親に孝なるそ

の人は、天の恵有とかや。寔に彼五郎右衛門、慈悲なきけふかく、親に孝有。其次第、巡見衆之御耳に立、お江戸迄披露有、孝行之品〳〵、聞召、奇特成もの也と、今度不思議に、被召出、三月十二日に、九拾石ノ田所永代つくり取に拝領す。是も偏に親に孝なる故ぞかし。よく〳〵孝をなし給へ。是を讀聞輩に不孝をなさん人あらじ。能々讀て聞すべし。

一ツとや人に勝れて孝行を駿河国の五郎右衛門

二ツとやふたりの親へ孝行をなせば冥利はまのまへに

三ツとや身にもかゝらぬ百姓に慈悲心ふかき五郎右衛門

四ツとやよきは心の慈悲者ゆへ其名は四方に隠なし

五ツとやいづみ村成百姓に五郎右がすくはぬものはなし

六ツとや昔は扱置今がよにかゝる慈悲者はまたあらじ

七ツとやならぬものをばあはれみて弥慈悲を深くする

八ツとややれ親たちへ孝行はあげて詞に尽されず

九ツとや今度俄に九十石永代田地を拝領す

十とや兎角孝行慈悲心のめうりに叶五郎右衛門

十一とや一門眷属悦びのいろめきわたるゆゑしきよ

十二とや俄に江戸入駿河なる五郎右衛門が事は隠なし

十三とや扱も親へ孝行はするが富士の山〳〵に

十四とや知も知らぬものをしなべて親に孝行慈悲もせよ

十五とや是を見る人聞人も五郎右が心を真似給へ

江戸で刊行された刷物が童蒙兒女の遊びとなっている。これで人々が商売でき、利益を得ている事も、五郎右衛門の慈悲ではないか、とし、その刷物を書き写しているのである。挿絵が書き写されていないのは残念だが、数え歌の存在など、大変興味深いものである。

この刷物の刊行時期について少し考えてみたい。『思忠志集』のこの段の日付は「天和二戌年」となっているが、この年記は信用して良いものである。なぜなら、引用文における年次の書き方を見ると、「過ツル申酉二年」「天和元年之飢饉に付」と、他の年に関しては年号を明記しているのに対し、五郎右衛門が表彰を受けた天和二（一六八二）年については「三月十二日に」とあるのみで年号を記していないからである。つまり該作は、五郎右衛門が表彰された年内に刊行されたのである。瓦版の速報性を考えれば、表彰後間もなくの事であったと考えても大過ないであろう。

問題となるのは、この刊行に幕府が関わっていたかという事だが、刷物の文面と筆録者である天野弥五右衛門長重の口吻からはそうした形跡は全く見て取る事ができない。そればかりか、「五郎右衛門孝行を世ノ人感、於江戸板行仕」と、「世ノ人」、すなわち民間による刊行であると言い、「故感心而板行を書写、今記之」と客観的に記しているのである。すなわちこの刷物もまた、幕府によって成ったものではない。民間で刊行され、流布したものであったのである。

先に『徳川実紀』が作品三「孝子今泉村五郎右衛門伝」を「刊行せらる」としているのは誤りではないかと指摘した。さらに言えば、この誤りは、作品二「五郎右衛門刷物」と混同した所から起こったのではないだろうか。もちろんこれは推測の域を出ないのだが、一案としてここに提示しておきたいと思う。

七 記念品としての作品成立

——作品四「六字名号父母画幅」の成立

第五節に見た年表⑩、作品三の林鳳岡「孝子今泉村五郎右衛門伝」と極めて深い関わりを持つのが、年表⑪に記した作品四「六字名号父母画幅」(中村家蔵)である(先述『孝子五郎右衛門 表彰と中村家文書の解説』口絵写真所載)。

ここでは五郎右衛門の父母らしき人物が二人座って談笑する姿が肉筆で描かれている。上部には「南無阿弥陀仏」と六字名号が大書され、次のような墨書が添えられている。(和歌を除き原漢文)

駿州富士郡今泉村ノ農民五郎右衛門、孝行上聴ニ達シ、御朱印ヲ下シ賜ハリ、永ク其ノ賦税ヲ免ジ玉フ。五郎右衛門、天野長重ニ就テ父母ノ影ヲ乞イ請ク。長重、画工長谷川等伯ニ命ジテ焉ヲ図セシメ、以テ予ニ六字ノ名号ヲ書セヨト請フ。因テ筆ヲ下ス。

仰げたゞうつし絵ながら父母の

ほかにはあらし神も仏も

天和三癸亥年 日本国中仏法弘通之大導師 遊行六七世 南門(印)⁽¹²⁾
小春十五日

南門とは、時宗の遊行第四十二世・尊任の事である(以下尊任と称す)。禰亘田修然・高野修著『遊行・藤沢歴代人史』⁽¹³⁾によれば、尊任は寛永二(一六二五)年生。寛文八(一六六八)年に四十四歳で遊行を相續して各地を廻る。天和三(一六八三)年、藤沢樹端上人の入寂を受けて帰山し、元禄四(一六九一)年に六十七歳で没するまで九年間独住したという。

その尊任が記す所によれば、この画幅は五郎右衛門が天野弥五右衛門長重に乞い、弥五右衛門が画を長谷川等伯に、賛を尊任に誂えたものであると言っているのである。

この画幅の成立に関する経緯は、『思忠志集』千四百十三番「駿河国今泉孝農夫江遺状」(年表⑬)という、天野弥五右衛門から中村五郎右

衛門に宛てた書簡の写しにも次のごとく記されている。書簡の日付は貞享元(一六八四)年三月六日とある。最初の饗応からは二年近くが経ち、画幅に尊任が記した年時から半年ほど後のものである。

一、井出太左衛門殿を以、内々被願候父母之絵像、長谷川等伯画。

幸遊行上人就下向、南無阿弥陀仏之御名号并事書、詠歌迄遊被下候。五郎右衛門から弥五右衛門への依頼は、井出太左衛門を通してのものであり、またそれが「内々」に希望していたものだった事が分かる。つまり中村五郎右衛門↓井出太左衛門↓天野弥五右衛門、と申し出が伝えられ、それを受けた天野弥五右衛門が長谷川等伯と尊任にあつらえた、という経路が見て取れるのである。

ここで思い出されるのは、第五節で見た年表⑩の作品三「孝子今泉村五郎右衛門伝」(林鳳岡)である。これもまた、天野弥五右衛門から持ちかけられた中村五郎右衛門↓井出太左衛門↓天野弥五右衛門↓林鳳岡という経路で出来上がったものであった。つまり作品三「孝子今泉村五郎右衛門伝」と作品四「六字名号父母画幅」とは、作品を依頼する人的つながりが一致しているのである。

その成立時期にも着目する必要がある。作品四の画幅は識語によれば「天和三癸亥年小春十五日」とあって、天和三(一六八三)年十月十五日の成立と分かる。また作品三「孝子今泉村五郎右衛門伝」は「天和三年癸亥季秋之日」と、天和三年九月の成立である。つまり両者は、ほぼ同時期に成った事が判るのである。

このように、作品三「孝子今泉村五郎右衛門伝」と、本節で見た作品四「六字名号父母画幅」とは、作品成立経緯、作品成立時期の二点において、極めて似通っているのである。

そして改めて確認しておきたいのは、『徳川実紀』には「儒臣林春常

信篤に命じ、其伝を作らしめて」と、五郎右衛門の伝記が幕府の命で作られたかのように書かれていたにも関わらず、作品三と作品四のどちらにも、成立をめぐるやりとりにも、幕府に関する事柄が全く出て来ないという事である。つまり、これらはあくまでも、幕臣である天野弥五右衛門の個人的営為なのであった。

作品三の林鳳岡「孝子今泉村五郎右衛門伝」や作品四「六字名号父母画幅」は、『徳川実紀』が記すように「褒顕」「旌表」、すなわち五郎右衛門を褒めて孝行を広めるような、庶民のために作られた物ではなかった。むしろ「其方末代」(『諸事覚書』)、すなわち五郎右衛門の榮譽が末代までも伝わるように、五郎右衛門個人のために作られたものだったのである。

八 おわりに

以上見てきた事を整理したい。

『徳川実紀』には、五郎右衛門の表彰に関して、幕府がその伝記を幕府の儒者・林鳳岡に書かせ、それを刊行させたとあり、この事は長く信じられてきた。しかし実際には、林鳳岡に作品三「孝子今泉村五郎右衛門伝」を書かせたのは幕府ではなく、遅れてきた幕臣の一人・天野弥五右衛門なのであった。またその行為もきわめて個人的なものであったと推測される。そして、その伝記が刊行された事はなかった。表彰後まもなく瓦版が刊行されており、『徳川実紀』の記事はそれと混同されたものと思しい。そして天野弥五右衛門は、これ以外にも作品一の藤原秀信・林鳳岡「五郎右衛門像賛」や作品四の長谷川等伯・尊任「六字名号父母画賛」といった記念品的作品を著名人に作らせており、作品一は自

分自身で蔵し、作品四は五郎右衛門に与えていたのであった。

このように諸作品の成立を見て行くと、綱吉の孝子表彰に対する幕府の関わり方を考え直す手がかりとなるのではないかと考えている。

綱吉期における孝子五郎右衛門に対する表彰は「当家の世となり、孝子節婦等を旌表せらるゝはじめなり」(『徳川実紀』)とされるように、綱吉の治世において大きな出来事であった。この事は、『諸事覚書』や二度目の江戸行における綱吉や桂昌院の饗応によって裏付ける事ができようかと思う。しかし、そののち続々と生まれた五郎右衛門をめぐる作品に関しては、必ずしも幕府主導で生まれた物ではなかったのである。簡単に言えば、天野弥五右衛門という個人が中村五郎右衛門という個人のために作らせた記念品だったのである。

その様子は、幕府の主導だけでなく、幕臣が、また民間が、すすんで孝行を形に残し、また世に広めようとしているように見える。またこの事は、孝行という徳目が必ずしも上からの押しつけや民心誘導という面からのみで論じ切れるものではなく、人々に好まれた話題であり、作品を生み出す喚起力を自ずから持っていた、という一面を見て取れるように思われるのである。

もちろんそのような結論を下すには事例として少なすぎる事は自覚している。さらに事例を積み上げる必要がある。幕府におけるその後の孝子表彰や、藩レベルの孝子表彰などについて、今後の調査を期したいと思う。

注

- (1) 『孝子五郎右衛門 表彰と中村家文書の解説』(平成十二年一月、富士市立中央図書館刊)に主要史料の翻刻と現代語訳が備わっている。
- (2) 「銀河」八号(昭和四十二年九月 奈良盛雄代表)所収。

- (3) 昭和四十七年三月 富士市刊。
- (4) 「静岡学園短期大学紀要」八 平成七年十一月。『地方史研究の諸問題』(平成九年六月 私家版) 所収。
- (5) 『明星大学青梅校舎日本文化学部共同研究論集第九集 理想と現実』(平成十九年三月 明星大学日本文化学部) 所収。
- (6) 「立教大学大学院日本文学論叢」四(平成十六年六月 立教大学大学院文学研究科日本文学専攻)。
- (7) 本文は『国史大系』によった。以下すべての引用は、基本的に通行字体へ改め、濁点・句読点などを私に改めた箇所がある。
- (8) なお本稿には井出「治」左衛門と井出「太」左衛門との、紛らわしい兩名が登場するので、ここでそれぞれについて区別しておく事とする。治左衛門は当時、駿河国富士郡在住の大宮代官。元禄四(一六九一)年の武鑑『(太平武鑑)』から宝永元(一七〇四)年までの武鑑では駿州御代官に名を連ねている(二百石)。いっぽうの太左衛門は江戸在住で、五郎右衛門の江戸滞在を世話した。武鑑では天和三(一六八三)年『癸亥江戸鑑』から御納戸元方頭(同心三十人)として登場し、以後貞享五(一六八八)年『太平武鑑大全』まで同役として掲載される。石高ははじめ六百石、貞享二年以降七百石。貞享二年『本朝武鑑』には、「井出太左衛門/父太左衛門 七百石/同心三十人 はま丁」とある。(以上武鑑は全て『江戸幕府役職武鑑編年集成』三〇五(平成八年九月 東洋書林)によった)
- (9) 平成八年二月 新人物往来社刊。
- (10) ただし「租」(『思忠志集』)——「税」(『鳳岡林先生全集』)、「報応」——「応報」の異同がある。
- (11) 鈴木寛馬『岳南史』(昭和四十八年三月 名著出版復刻版)。序文「刊行にあたって」(株式会社名著出版)によれば、初刊本は昭和六年から十年刊との事である。
- (12) なおこの和歌は『歌林一枝』(写本)巻之三に次のように記されている(内閣文庫本に拠った)。「遊行派の僧尊任僧正といひしか駿河の国の孝子ときこえし今泉五郎左衛門か父はゝの肖像を画かゝせてもたりし。その讃をこはれし時のうたに／あふけたうつし絵なからかそいるの外にはあらし神も仏も」。
- (13) 平成元年十月 末秀寺。